

肝心かなめの

肝臓のはなし

4

香川大学医学部消化器・神経内科教授
正木 勉

B型慢性肝炎はB型肝炎ウイルス感染による、6カ月以上続く肝臓の炎症です。血液検査で炎症がない症例も多いのに、なぜ治療・経過観察しなければならぬかについてお話します。

2016年の統計によると、日本人の死亡原因の第1位はがんで、約37万人が亡くなっています。このうち肝細胞がんは2万8000人(約7%)。これは臓器別では男性で第4位、女性で第6位。C型肝炎ウイルスによる肝がんは年々減っているのですが、実はB型肝炎ウイルスによるものは減少していないのです。

B型慢性肝炎

炎症がなくてもがん化
定期的に観察が必要

香川大学付属病院における、2004年から15年までの初発肝細胞がん患者は678人。これを前期(04-09年)、後期(10-15年)に分けると、C型肝炎ウイルスが原因である肝がんは、73・4%から49・6%と減少。一方で、B型肝炎ウイルスによるものは10%前後で変化していません。ここ15年、肝がん患者の10人に1人は、B型肝炎ウイルスの持続感染によるものなのです。

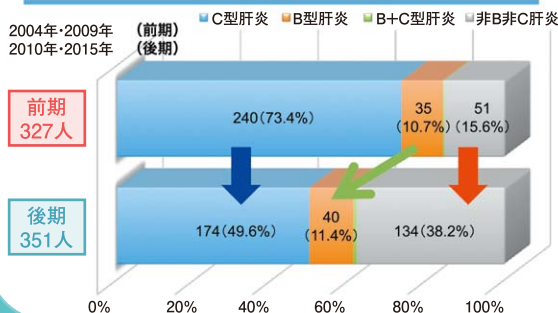
よって、発がんの可能性のあるB型肝炎肝炎では、できるだけ炎症を和らげ、体内のウイルスの量を少なくする治療が必要

です。しかしたちの悪いことに、このB型肝炎ウイルスは、時として炎症が強くない(血液検査では肝機能正常)にも関わらず、突然がんが発生しているという場合も少なくありません(肝臓専門医である私も手を焼いた症例もあり、将来このコラムでお話します)。

B型肝炎ウイルスに感染している人で、一見炎症がない人も、がんが発生していないかどうかを血液で判断できる腫瘍マーカーの定期的な検査、かつ定期的な画像診断で経過観察していかねばならないのです。

次号は、慢性B型肝炎の診断についてわかりやすくお話しします。

【肝細胞がんの原因】



【肝細胞がん死亡数】

2万8千人

がん死の7%

男性(1万8千人)ー4位
肺、胃、大腸、**肝臓**、膵臓

女性(1万人)ー6位
大腸、肺、膵臓、胃、乳房、**肝臓**